「葦」第43号発刊に寄せて

奈良県医療政策部参与
榊　寿右

今年度も奈良県立医科大学附属病院看護部の臨床研究誌である“葦”が発刊されます。多忙極める看護活動の中で看護研究（臨床に直結した）を行う事は大変なこととは思います。しかし、大学病院という環境の中であればこそ、研究的側面のある看護活動を行い、これを世に示すことは極めて重要なことです。わたしは“医療に携わる者は常にリサーチマインドを持っていなければならない”と常日ごろから思っています。思い返せば、わたしが５０年以上も前に医師を目指そうと思ったのは、“水俣病”がチッソ水俣工場が海に放出した有機水銀によるものだということを世に明らかにした細川医師を知ったからです。皆さんがご存じのように、チッソ水俣工場附属病院長であった細川医師は工場周辺の住民に奇病が発生しているのを知ります。放置せず、文献を調べた結果、その奇病が有機水銀中毒であるハンター-ラッセル症候群に酷似していることに気付くのです。そして、この住民の奇病発生と時を同じくして、“猫踊り病”と世間から言われている猫の奇病が起こっていました。細川医師は、この奇病は工場から排出される有機水銀によるものとの確信を持ち、密かに猫に工場排水をかけた食物を与える実験を行いました。遂に２００匹目の猫が“猫踊り病”を起こしたのです。そして水俣で生じている奇病の原因は、工場から海に排出される有機水銀に汚染された魚を食べることによって生じる公害病であることを世に示したのです。

医療に携わる者は、病に冒された人たちに対して何時も“崇高な医の心を持って”で臨まなければなりませんが、同時に“病に対して疑問が生じた”ときにはその原因を明らかにし、解決してゆく責務もあると思っています。そのために、何時もリサーチマインドを持ち合わせていなければなりません。大学病院という臨床の場は、常にその場が要求される場でもあるべきであり、医療人として働く者に“リサーチマインドの重要性を教える場だ”と思っています。大学病院の看護部であればこそ、そのような教育にも重点を置いていただきたいものです。

医療者として、許しがたいものに“病を持つ者に対する偏見、差別”があると思います。そのひとつ、ハンセン病ほど、でたらめで偏見にさらされてきた病気はありません。仏罰、血筋の汚れ、うつりやすい、不治の病‥‥。病院長になって間もない頃に、東京都東村山市にある国立ハンセン病資料館で行われていた企画展“ちぎれた心を抱いて”を見に行ったことがあります。この病ゆえに、各地の療養所に強制隔離された子どもたちの記録が展示されていました。国策として、いわれなき隔離が行われ、塀の中で一生を終える定めと知った子供たちの、いずれも胸を打っ

て止まない作文の数々に、涙が出て止まりませんでした。子供たちの唯一の宝物は肉親と暮らした遠い記憶だけ！！“思い出は　わたしの胸の小さな銀の箱にあるそんなことがあるってことも　中に何が入っているかも　誰もしらないの”。東日本大震災で親を失った幼い子供たちの心にも通じることでしょう。わたしは院長時代には“葦”の論文に目を通しましたが、医療人のあるべき優しさ、特に患者の心情について取り扱った論文が少ないように思ってきました。

わたしの最も好きな言葉は、土佐勤王党を率いた幕末の志士、武市　瑞山の“花は清香に依って愛され、人は仁義を以て栄える”という言葉です。“人の心を察し、人を思いやり、そして正義の貫くこと、道理に順じることこそが人の栄える道だ”と説いています。奈良県立医科大学附属病院看護部が道理から外れることなく、“人の心を察し、人を思いやる看護実践の場であり、研究の場”であることを心から願っています。